

【B年】受難節第1主日(2022年3月6日)

【旧約聖書日課】 エレミヤ書31章27～34節

27見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を蒔く日が来る、と主は言われる。28かつて、彼らを抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそうと見張っていたが、今、わたしは彼らを建て、また植えようと思張っている、と主は言われる。

29その日には、人々はもはや言わない。

「先祖が酸いぶどうを食べれば
子孫の歯が浮く」と。

30人は自分の罪のゆえに死ぬ。だれでも酸いぶどうを食べれば、自分の歯が浮く。

31見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。

32この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙2章10～18節

10というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであつたからです。11事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、

12「わたしは、あなたの名を
わたしの兄弟たちに知らせ、
集会の中であなたを賛美します」

と言ひ、13また、

「わたしは神に信頼します」

と言ひ、更にまた、

「ここに、わたしと、

神がわたしに与えてくださった子らがあります」
と言われます。14ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、15死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあつた者たちを解放なさるためでした。16確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。17それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となつて、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかつたのです。18事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

【福音書日課】 マルコによる福音書1章12～15節

12それから、「霊」はイエスを荒れ野に送り出した。13イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書31章27～34節

27その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を詩く。28かつて、引き抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらすために彼らを見張っていたが、同じように、建て、植えるために彼らを見張る——主の仰せ。

29その日には、人々はもはや

「父が酸っぱいぶどうを食べると
子どもの歯が浮く」とは言わない。

30人は自分の過ちのゆえに死ぬのだ。酸っぱいぶどうを食べる人は、誰でも自分の歯が浮く。

31その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家、およびユダの家と新しい契約を結ぶ。

32この契約は、それは、私が彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に結んだ契約のようなものではない。私が彼らの主人であったにもかかわらず、彼らは私の契約を破ってしまっ——主の仰せ。33その日の後、私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである——主の仰せ。私の律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心に書き記す。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。34もはや彼らは、隣人や兄弟の間で、「主を知れ」と言って教え合うことはない。小さな者も大きな者に至るまで、彼らは皆、私を知るからである——主の仰せ。私は彼らの過ちを赦し、もはや彼らの罪を思い起こすことはない。

マルコによる福音書1章12～15節

12それからすぐに、霊はイエスを荒れ野に追いやった。13イエスは四十日間荒れ野にいて、サタンの試みを受け、また、野獣と共におられた。そして、天使たちがイエスに仕えていた。

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」と言われた。

ヘブライ人への手紙2章10～18節

10というのは、多くの子たちを栄光へと導くために、彼らの救いの導き手〔別訳→創始者〕を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。11実際、聖とする方も、聖とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それゆえ、イエスは彼らをきょうだいと呼ぶことを恥としないで、

12「私は、きょうだいたちに

あなたの名を告げ知らせ

集会の中であなたを賛美します」

と言い、13また、

「私は神に信頼する」

と言い、さらにまた、

「見よ、私と

神が私に与えてくださった子たちがいます」

と言われます。14そこで、子たちは皆、血と肉とを持っているので、イエスもまた同じように、これらのものをお持ちになりました。それは、ご自分の死によって、死の力を持つ者、つまり悪魔を無力にし、15死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた人々を解放されるためでした。

16確かに、イエスは天使たちを助ける〔直訳→引き受ける〕のではなく、アブラハムの子孫を助けられるのです。17それで、イエスは、神の前で〔直訳→神の事柄について〕憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を宥める〔別訳→贖う〕ために、あらゆる点できょうだいたちと同じようにならなければならなりませんでした。

18事実、ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・3月6日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。「受難節」は、前週の「灰の水曜日」から始まっており、「第1主日」は必ずしも「受難節」の始まりを告げる位置づけとはなっていない。とは言え、この日の聖書日課には、伝統的に「受難節(四旬節)」を40日で定める根拠とされる「主イエスの荒れ野の誘惑」が充てられてきた。「荒れ野の誘惑」は、主イエスの公生涯における史実としてというよりも、旧約の「出エジプト物語」を予型として位置づける物語として伝承されてきた。

・福音書日課は、「マルコによる福音書」の伝える「荒れ野の誘惑」の箇所。旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、「新しい契約の預言」とされる箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「救いの創始者」としての主イエスを提示する箇所。

旧約日課(エレミヤ 34 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ教正典「後の預言者」の第二に置かれた預言書で、「イザヤ書」および「エゼキエル書」と共に「三大預言書」と呼ばれる。「預言者エレミヤ」は、南王国末期に国政改革を断行したヨシヤ王の下、地方聖所(アナト)出身の地方祭司でありながら改革に登用され、宮廷預言者として王国滅亡まで預言活動を続け、滅亡後はエジプト亡命組に連行される形でエジプトに移住、同地で没したとされる。ヨシヤ王は、アッシリア帝国末期に台頭してきたバビロニア・メディア連合と連携していた親バビロニア派であり、王の下で進められた改革は親バビロニア派として進められたと考えられる。ヨシヤ王没後の南王国宮廷では、親エジプト派と親バビロニア派の対立構図が鮮明になり、エレミヤは親エジプト派から厳しい攻撃を受けながら預言活動を続けたとされる。エレミヤは宮廷預言者であったので、その預言活動は宮廷の書記官(バルクの名が知られている)によって記録保存され、それらを基に編集された「預言者エレミヤの預言の書」が本預言書の原資料になっていると考えられる。書記官バルクは、王国滅亡後の捕囚期に(エレミヤと異なり)バビロンで活動しており(旧約聖書統編「バルク書」を参照)、彼のような立場の者やバビロンに移住していた祭司・預言者(エゼキエルのような)らによって、「預言者エレミヤ」の歴史的位置付けや祭司・預言者の伝統が継承されたと考えられる。捕囚期後のユダヤ帰還・神殿再建・ユダヤ共同体再興の事業を基礎づけるものとなった正典「律法と預言者」の編纂は、この「預言者エレミヤ」の活動を継承する立場の者たちによって多くが担われたと推察される。

・日課箇所は、「新しい契約の預言」と呼ばれ、主イエスが最後の晩餐で示されたとされる「新しい契約」(Iコリ 11:25)や、「新約」全体を示すものとして理解されてきた。

・一方、ユダヤ教の歴史的な文脈から解釈するならば、エレミヤの「新しい契約」とは、「エズラ記・ネヘミヤ記」で捕囚解放後に神殿再建と合わせて書記官エズラによって「律法」が朗読され、それに応答する民が再興された出来事(ネヘミヤ 8 章)を指していると考えるのが自然である。正典「律法と預言者」によれば、エジプトを出てシナイ山に至ったモーセ率いる民が、授与された律法をモーセが朗読するのを聞き、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」(出エジプト 24:7)と応じて「契約の民」となった。この民が神との契約を破った結果、王国は滅び、民は捕囚により約束の地から除かれた、とするのが預言者らの告げた神の裁きである。この民を再び「契約の民」とする「新しい契約」は、シナイ山の契約の出来事と基本的には同じ形式を取るのが自然である。

・この観点の延長線上に、主イエスの出来事や「主の晩餐」における「契約の血」(マルコ 14:24)を置くならば、「主の晩餐」の食事の儀式としての性質や「血」のしるしは、シナイ契約(出エジプト 24 章)の更新として位置づけられていることが分かる。「新しい契約」としての「新約」は、このような「旧約」との連続性の中で解釈される必要がある。

使徒書日課(ヘブライ 2 章より)

・「ヘブライ人への手紙」の概説は、前回「聖書と祈りの会 220323」資料を参照。

・日課箇所は、本書簡が「イエス」を明示してその神学的な位置づけを提示し始める最初の一部である。

・10 節で主イエスを「救いの創始者(アルケーゴス)」と表現しているが、11 章では「信仰の創始者(アルケーゴス)」と表現している。「アルケーゴス」は、「アルケー(初め)」と「アゴー(連れて行く)」の合成語で、「先導者」という意味。「アゴー」からは、「アゴラ(広場・市場)」、「アグラ(漁・猟)」、「アグロス(牧場・耕地・村落)」などの派生語が生まれており、「アゴー」に「集める」というニュアンスが含まれていることが分かる。「アルケーゴス」は、単に「模範となる先達」ということではなく、「一つの集团的営みを主導する者」を指すために用いられている。この語は、「使徒言行録」では「導き手」(使徒 3:15、同 5:31)と訳されている。

・12 節は詩編 22:23 の引用。「集会(エクレシア)」は、「教会」と訳される語だが、新共同訳の本書簡では、12:23 でも「集会」と訳されている。10:25「集会」は「エピシュナゴゲー」の訳。「シュナゴゲー」は、新約中 56 例の多くで「会堂」と訳されるが、「教会」を指していると解されて「集会・集まり」と訳される例もある(ヤコブ 2:2)。

・15 節「悪魔(ディアボロス)」は、「投げつける・中傷する」と訳される「ディアバロー」の派生語で、「中傷する者」の意。福音書では、マルコ以外で限定的に用いられ、パウロ書簡でも用例に偏りがある(エフェソ書や牧会書簡のみ)。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの「荒れ野の誘惑」と「宣教の開始」を告げる部分で、どちらの記述も他の福音書と比べて著しく簡潔になっている。

・マルコ福音書の伝える「荒れ野の誘惑」伝承は、マタイ福音書やルカ福音書のような物語の拡大がされておらず、マタイやルカのように「悪魔(ディアボロス)」を登場させることもしていない。「サタン(サタナス)」は、ヘブライ語「サターナ」に由来する語で、原意は「妨げる者・躓かせる者」(民数記 22:22 など)であり、旧約においては神の使いの一種である(ヨブ記 1 章なども参照)。ただし、ギリシア語旧約聖書(七十人訳)でも、例えば「ヨブ記」の「サタン」は「ディアボロス」と訳されており、翻訳の過程で「サタン」を「ディアボロス」と解する理解が起こっている。マルコ福音書は、この箇所に限らず「ディアボロス(悪魔)」を用いていない。また、マルコ福音書は、この箇所のほかに、「ベルゼブル論争」の箇所(3:23,26)、「種を蒔く人のたとえの説明」の箇所(4:15)、「ペトロが叱責される」箇所(8:33)で「サタン」が用いられるが、マタイおよびルカでは「種を蒔く人のたとえの説明」で「サタン」の代りに「悪い者」または「悪魔」を用いている。

・13 節「野獣(テリオン)」は、「黙示録」では象徴的な意味で用いられるが、他の新約文書中では文字通り「野生の獣」を指す用例。ただし、この語で表わす生き物の中に「蛇」も含まれる(使徒 28:4,5)。「蛇」は、旧約中で、創世記 3 章の「墮罪物語」で登場するほか、「出エジプト物語」中でも荒れ野を旅する民に危害をもたらすものとして(民数記 21 章)、またモーセの支配下にあるものとして(出エジプト 4:3、同 7 章)、登場する。マルコは、それらを踏まえて、「荒れ野」の出来事の中に「蛇」を登場させていると解することもできる。

・「天使(アンゲロス)」は、「使者」とも訳され(1:2→洗礼者ヨハネを指して用いられている)、必ずしも天的存在に限定されない。

来週の誕生日 (3 月 6 日～12 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-294 番「ひとよ、汝が罪の」(= II 99 番)は、16 世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンがルターの説教に影響されて作った詞で、原詞は 22 節で構成された受難物語を歌う詞だが、讃美歌集には 1 節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525 年発行の詩編歌集に詩編 36 編のための曲として作曲。グライターの、一時期プロテスタント教会に属し牧師職にも就いたが、後年カトリックに回帰した。

・21-284 番「荒れ野の中で」は、受難節の讃美歌として英米の讃美歌集で広く採用されている。作曲は、19 世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、フランシス・ポットが大幅に改作した詞が広く用いられている。

・21-74 番「キリストの示す神を」は、チロル地方出身の現代カトリック宗教詩人トゥールマイルが新しく創作したエキュメニカル讃美歌。17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家クリューガーの曲につけられている。

21-294「ひとよ、汝が罪の」**O Mensch, bewein dein Sünde gross**

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wollt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

21-284「荒れ野の中で」**Forty days and forty nights**

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.

21-74「キリストの示す神」**Dank sei dir, Vater**

1. Dank sei dir, Vater, für das ewge Leben / Und für den Glauben, den du uns gegeben, / Daß wir in Jesus Christus dich erkennen / Und Vater nennen.
2. Jedes Geschöpf lebt von der Frucht der Erde; / Doch daß des Menschen Herz gesättigt werde, / Hast du vom Himmel Speise uns gegeben / Zum ewgen Leben.
3. Wir, die wir alle essen von dem Mahle / Und die wir trinken aus der heiligen Schale, / Sind Christi Leib, sind seines Leibes Glieder, / Schwestern und Brüder.
4. Aus vielen Körnern ist ein Brot geworden: / So führ auch uns, o Herr, aus allen Orten / Zu einer Kirche durch dein Wort zusammen / In Jesu Namen.
5. In einem Glauben laß uns dich erkennen, / In einer Liebe dich den Vater nennen, / Eins laß uns sein wie Beeren einer Traube, / Daß die Welt glaube.
6. Gedenke, Herr, die Kirche zu erlösen, / Sie zu befreien aus der Macht des Bösen, / Als Zeugen deiner Liebe uns zu senden / Und zu vollenden.